

## 高齢期の配偶者選択における意識と行動の変化 — 1984 年調査と 2009 年調査の比較 —

Change of Marital Selection of the Elderly  
— Through Comparing the Investigations in 1984 and 2009 —

高 橋 久美子

Kumiko TAKAHASHI  
福岡教育大学家政教育講座

(平成24年 9 月20日受理)

直系家族制規範の衰退と高齢者人口の増大にともない, 高齢期における結婚は社会的な課題になると考え, 1984 年に高齢者結婚相談所の会員を対象に調査を実施した。本研究では高齢期の配偶者選択における意識と行動の変化を明らかにすることを目的とし, 2009 年調査との比較をもとに, 結婚の抑制要因と動機づけ要因, 希望する結婚形態と夫婦関係, 結婚後の親族交際意識を検討した。男性の未婚者が急増している。子どもへの期待や否定的規範の圧力は低下し, 入籍希望が増加している一方, 相手の子どもと親密な関係を望む意識は低い。子どもとの距離のとり方も重要であるが, 夫婦としての関係をどう結び深めていくことができるかが大きな課題である。

### 1. 問題の所在と課題

結婚適齢期規範がなくなり, 子どもを産むか否かは個人の自由な権利と考えられるようになり, 結婚の目的は変化している。年をとっても結婚はできるが, 女性の閉経年齢は一般に 50 歳前後であるから, 子どもを産み育てることを目的とする場合は年齢制限が生じる。50 歳は節目の時期といえる。平均的な家族のライフサイクルでは, 50 歳代は子どもが独立し, 老後に向かう時期にあたる<sup>1)</sup>。人口動態統計によると, 2010 年の 50 歳以上の婚姻件数は男性が 25,280 件に対し, 女性は 12,918 件である。全婚姻中における 50 歳以上の婚姻割合を時系列でとらえると, 1960 年, 1980 年, 2000 年, 2010 年には男性が 1.2%, 1.2%, 3.3%, 4.3% に対し, 女性は 0.3%, 0.6%, 1.8%, 2.2% である<sup>2)</sup>。男女で差があるにしても, 高齢期の結婚は男女ともに増加傾向にあるが, 高齢者人口の増大と無配偶者の割合を考慮すれば, 依然として低い状態が続いている。

一方, 社会全体としては性の解放と自由化が急

速に進んでおり, 高齢者の恋愛や結婚を抑圧する規範も低下していると予想される。しかし, 日本の高齢者は欧米諸国に比べて友人の多くが同性であり, 異性の友人がいる者は少ない<sup>3)</sup>。長寿化によって高齢期の生活や生き方が多様化していることに研究者の関心が高まり, 家族関係にとどまらず友人関係も取り上げられるようになったが<sup>4)</sup>, 異性の友人関係を活性化させることに対する着眼はみられない。さらに, 高齢期の結婚に焦点をあてた研究も乏しいのが現状である<sup>5)</sup>。

高齢期には子どもを産み育てることが結婚の目的ではなくなり, 若い世代に比べて異性との出会いと交際の機会が乏しいので, 結婚相談所がはたす役割は大きい。本研究に先立って 1984 年に, 高齢者結婚相談所の会員を対象に配偶者選択の意識と行動を調査した<sup>6)</sup>。戦後の民法改正によって直系家族制規範が衰退し, さらに高齢者人口の増大によって, 高齢者の孤立や孤独の問題が深刻になると予想され, 伝統的観念に縛られない主体的で自立的な老後の生き方が求められていることか

ら<sup>7)</sup>、高齢期の結婚は重要な課題になると考えた。当時はまだ高齢者のための結婚相談所の数は少なく、偏見も強かった。

今日では結婚と家族のあり方がさらに変化している。高齢者と子どもの同居率は1980年には7割であったが、2010年には4割に減少しており<sup>8)</sup>、実態とともに意識面でも別居支持の高齢者が多数派になった<sup>9)</sup>。これまで家族によって担われてきた介護が、介護保険制度によって社会化された影響は大きいといえる。だが、別居を前提に高齢者と子どもが親密に相互交流する規範は定着しておらず、親子関係が希薄になってきていると思われる一方、中高年の離婚が増加を続け、若い世代では結婚活動といわれる現象が盛んであるが<sup>10)</sup>、晩婚化にとどまらず非婚化の動きもみられ、無縁社会の問題が指摘され始めた<sup>11)</sup>。

本研究の目的は、25年前の調査との比較を通して、夫婦家族制意識の形成に注目しながら、高齢期の配偶者選択における意識と行動の変化を明らかにすることにある。高齢期の結婚では、子どもを産み育てる親の役割がないので、夫婦としての関係がとくに重要になる。若い世代に比べて結婚期間は短い、短く限られた結婚生活を通して互いに老いを支え合い、介護の役割を引き受けながら、死を看取ることになる。高齢期の結婚における夫婦適応の問題を明らかにするには、これらの課題に対する考え方の一致・不一致を検討することが必要である。

## 2. 研究方法

25年前と同様に、50歳以上を会員資格の条件としている高齢者結婚相談所に協力を依頼し、札幌、東京、宇都宮、福岡の支部で、2009年10月～11月に調査を実施した。各支部ともに定例の集団見合いが月1回あり、出席者には会場で、欠席者には郵送で調査票を配布してもらい、回収は

全て郵送で行った。無記名調査であり、匿名性の確保と参加協力は自由意思であることを調査票に明記し、同意を得た。分析に用いた人数は、男性81人と女性96人の合計177人である。

前回調査は1984年に東京、大阪、京都、福岡の支部で実施し、分析人数は男性129人と女性101人の合計230人である。どの支部もまだ設立後3年以内の時であり、会員資格の条件が当時は男性が55歳以上、女性は50歳以上であった。調査に協力してもらった高齢者結婚相談所は、日向市老人福祉センター長であった和多田によって1980年にセンター内に開設された後に、民間の「茶のみ友達相談所・無限の会」として全国規模で組織された。会員登録は厳しく、結婚していないことを確認するために、戸籍謄本と住民票の提出を義務づけている<sup>12)</sup>。

集団見合いの方法は、今では多くの結婚相談所や男女交際のある合コンでも行われるようになって一般化した。調査対象にした高齢者結婚相談所では設立当初から実施している。二人が最初から結婚相手として出会うという点で、恋愛結婚とは異なり、さらに、不特定多数の異性との出会いと同性との競争の中から結婚相手を探すという点で、一対一でなされる伝統的な見合いとも異なる配偶者選択の方法である。

調査項目は前回とほぼ同じ内容にした。調査内容を整理すると図1のようになる。結婚の動機づけ要因と抑制する要因、希望する結婚形態と夫婦関係、結婚後における親族交際意識の3つのカテゴリーからなり、☆印がついている病気時の不安、性規範、配偶者への介護意欲は今回の調査で加えた項目である。配偶者選択の意識と行動の変化と適応の問題を考察するために、男女別に25年間の変化を明らかにし、さらに、1984年と2009年について男女間比較をもとに考え方のずれの有無を検討した。

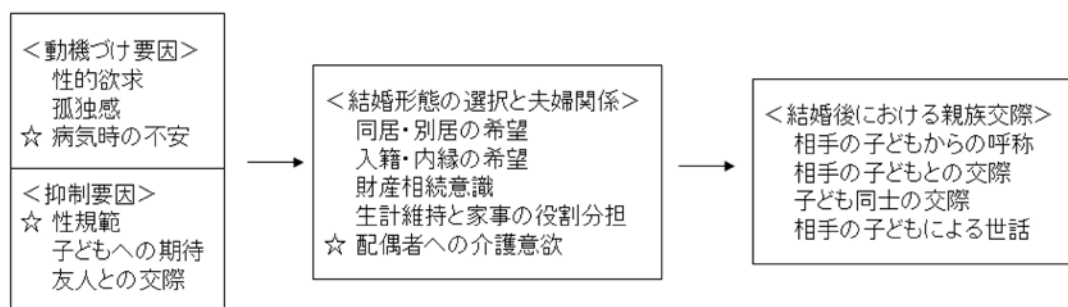


図1 研究枠組と調査項目

### 3. 分析結果

#### (1) 対象者の概況

表 1 に 1984 年調査と 2009 年調査における対象者の概況を、対象者の概況についてカイ 2 乗検定結果を表 2 に示した。

男女ともに年齢が上昇している。とくに女性の年齢の上昇が顕著であり、50 歳代が 8 割から 4 割に半減し、60 歳代前半に最多の年齢層が移行している。だが、一般に高齢者と定義される 65 歳以上の年齢層については、2009 年には女性は 2 割に増加しているが、男性も 6 割に増加しているので、年齢差は依然として大きく、婚活をする高齢女性はまだ少ないのが現状である。

未婚者の割合が女性は 25 年前にすでに 1 割を超えており、年度比較による変化はみられない。一方、男性は 1% から 16% に激増し、2009 年には女性を上回る高さである。男性は未婚者の増加によって子どもがいる者が 9 割から 7 割に減少しているが、女性は 7 割弱で変化はなく、子どもの有無についても男女差がなくなってきた。さらに世帯構成についても、男性は子ども夫婦との同居が 23% から 5% に大きく減少し、女性の世帯構成と類似してきた。男女とも独居が増加し、2009 年にはいずれも 7 割に達している。

持家率は男性が 7 割であるのに対し、女性は 5 割である。就労状況については、無職が男性は 36% であるのに対し、女性は 24% である。男性に比べて女性は年齢層が若いので有職者が多く、主な収入源について男性は年金が 6 割に対し、女性は就労が 5 割である。

#### (2) 動機づけ要因と抑制要因

結婚を動機づける要因と抑制する要因について年度比較による変化と、各年度における男女差をカイ 2 乗検定した結果を表 3 に示した。

性的欲求は男性では変化がないが、女性では変化がみられ、どの年度も男女差が大きい。孤独感の程度は男女とも年度変化はないが、どの年度も男女差が大きい。性的欲求と孤独感のいずれも男性は女性よりも強い。

図 2 は、性的欲求と孤独感の有無を組み合わせで男女別と年度別に比較したものである。男女とも性的欲求と孤独感の「どちらもない」はどの年度も少ない。しかし、「どちらもある」が男性はどの年度も 7 割以上で変化はないが、女性では半減しており、2009 年には「孤独感のみ」が 5 割に増加している。2009 年調査では結婚生活で性生活を重視する程度についても尋ねた。「重視す

表 1 対象者の概況

	男 性		女 性	
	1984年	2009年	1984年	2009年
50～54歳	—	4.9	46.5	13.5
55～59	19.4	9.9	33.7	25.0
60～64	31.0	23.5	16.8	40.6
65～69	28.7	28.4	3.0	14.6
70～74	11.6	22.2	0	5.2
75～	9.3	11.1	0	1.0
未婚	0.8	16.0	12.9	14.6
既婚・子どもなし	7.0	9.9	18.8	17.7
既婚・子どもあり	92.2	74.1	68.3	67.7
独居	58.9	69.1	63.4	74.7
子ども夫婦と同居	23.3	4.9	7.9	1.1
未婚子と同居	15.5	11.1	21.8	13.7
その他(親など)	2.3	14.8	6.9	10.5
持家	74.4	68.8	52.5	49.0
公営住宅	8.5	11.3	12.9	15.6
賃貸住宅	14.0	18.8	27.7	31.3
その他	3.1	1.3	6.9	4.2
自営	30.2	18.2	27.1	12.2
管理・常雇	24.4	23.4	35.3	32.2
臨時・パート	7.6	22.1	10.4	31.1
無職	37.8	36.4	27.1	24.4
就労	—	33.8	—	54.3
年金	—	58.8	—	35.1
財産収入	—	5.0	—	4.3
その他	—	2.5	—	6.5

表 2 対象者の概況の有意差 (カイ 2 乗) 検定

	年度比較		男女比較	
	男性	女性	1984年	2009年
年齢	*	***	***	***
未婚・既婚・子の有無	***	n.s.	***	n.s.
世帯構成	***	*	**	n.s.
居住形態	n.s.	n.s.	**	n.s.
就労状況	*	***	n.s.	n.s.
主な収入源	—	—	—	*

\* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001, n.s. no significant

表 3 動機づけ要因と抑制要因の有意差 (カイ 2 乗) 検定

	年度比較		男女比較	
	男性	女性	1984年	2009年
性的欲求	n.s.	***	***	***
孤独感	n.s.	n.s.	***	***
悩み事の相談相手	***	n.s.	**	***
病気の世話を頼む相手	—	—	—	*
性規範:自分自身	—	—	—	n.s.
性規範:子ども	—	—	—	n.s.
性規範:世間一般	—	—	—	n.s.
子どもへの経済的期待	***	***	n.s.	n.s.
子どもへの介護期待	***	**	n.s.	**
信頼できる友人数	n.s.	n.s.	***	**

\* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001, n.s. no significant

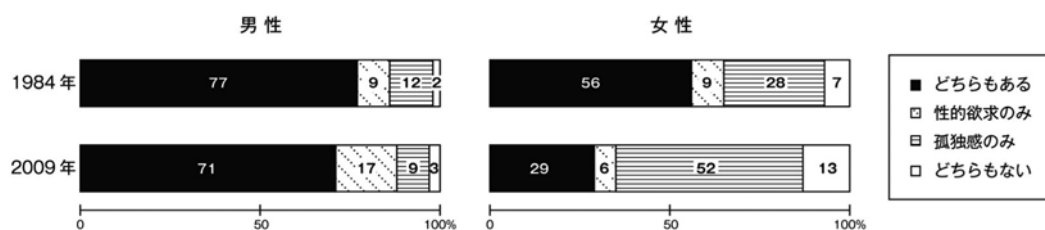


図2 性的欲求と孤独感

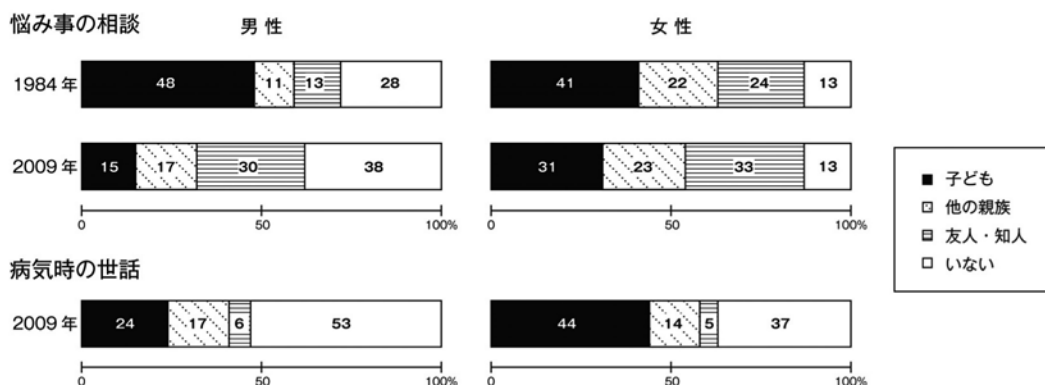


図3 悩み事の相談と病氣時に世話を頼む相手

る」が男性は6割以上いるのに対し、女性は3割以下と少ない。結婚への動機づけ要因である孤独感がある者は男女ともに多いが、性的欲求については男性と女性の間のずれが大きい。

悩み事の相談相手はどの年度も男女差が大きく、男性にだけ年度変化がみられた。2009年には病氣時に世話をしてくれる人の有無も尋ねたが、男女差がみられた（表3）。図3に、悩み事の相談相手と病氣時に世話を頼める相手に対比させた。悩み事の相談相手では男女とも「子ども」が減少し、「友人・知人」が増加している。男性は相談相手が「いない」が多く、4割に増加している。病氣時の世話を頼む相手では男女とも「友人・知人」を挙げる者は非常に少なく、「いない」が多い。男性では53%、女性も37%いる。

抑制要因としてまず否定的な性規範意識を取り上げ、「高齢者の結婚を恥ずかしいことと思うか」を、自分自身と子どもと世間一般の考えに分けて尋ねた。いずれについても男女差はない（表3）。具体的には図4から、高齢者の結婚についての規範意識は男女で差はなく、世間一般では「恥ずかしいことである」がまだ1割程度はいるが、全体としては否定的な規範意識は低下していることが指摘できる。

抑制要因と考えられる子どもへの期待は、経済面と介護について尋ねた。経済的期待と介護期待のいずれも男女ともに年度変化が大きく、男女差は2009年の介護期待でだけみられた（表3）。図5から、今日では、経済的には子どもに期待をする者はほとんどいない。さらに、介護についても

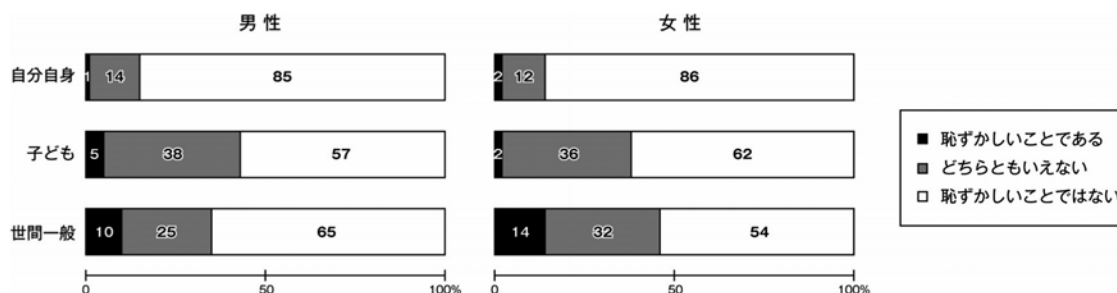


図4 高齢者の結婚に対する規範意識（2009年）

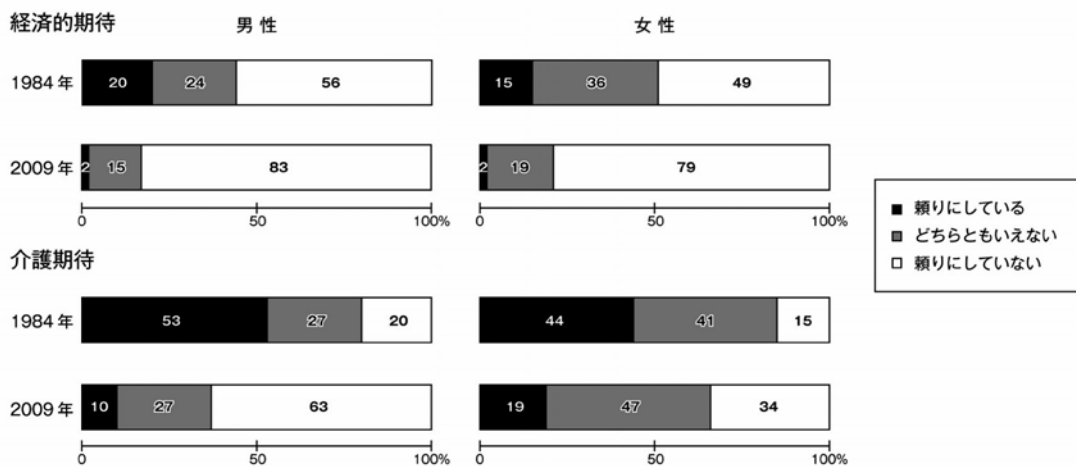


図5 子どもへの期待（子どもがいる者）

子どもを「頼りにしている」者は減少し、「頼りにしていない」が増加している。注目すべき点は、子どもへの介護期待は女性以上に男性で大きな変化が生じており、「頼りにしていない」という男性が6割を超え、女性の2倍である。

### (3) 結婚形態の選択と夫婦関係

年度比較による変化と各年度の男女差についてカイ2乗検定の結果を、表4に示した。同居・別居の希望は女性のみ年度変化がみられ、2009年には男女差がなくなった。入籍・内縁の希望では男女とも年度変化が大きく、どの年度も男女差はない。財産相続意識についてはどの年度も男女差があり、男性のみ年度変化がみられた。経済と家事は生活の基本要素であり、生計維持と家事の分

表4 希望する結婚形態と夫婦関係の有意差（カイ2乗）検定

	年度比較		男女比較	
	男性	女性	1984年	2009年
同居・別居の希望	n.s.	**	**	n.s.
入籍・内縁の希望	**	***	n.s.	n.s.
財産相続意識	*	n.s.	*	*
生計維持(同居の場合)	—	—	—	n.s.
家事分担(同居の場合)	—	—	—	n.s.
生計維持(別居の場合)	—	—	—	n.s.
家事分担(別居の場合)	—	—	—	n.s.
配偶者への介護意欲	—	—	—	n.s.

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ , n.s. no significant

担についての考えを同居と別居の場合に分けて尋ねたが、いずれも男女差はない。2009年には配偶者への介護意欲も尋ねたが、男女で差はない。

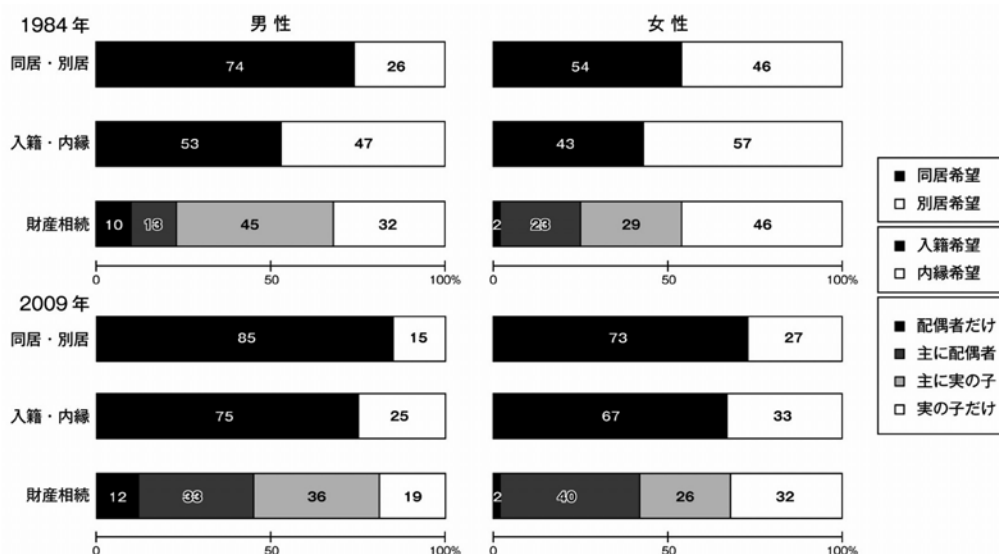


図6 希望する結婚形態と財産相続意識の関係

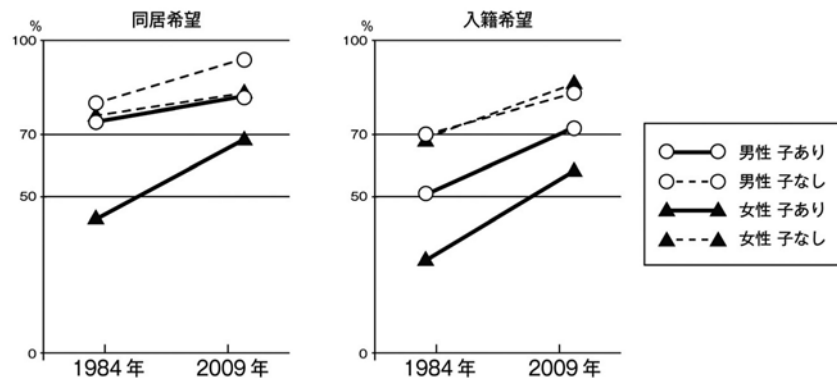


図7 子の有無別にみた同居希望と入籍希望

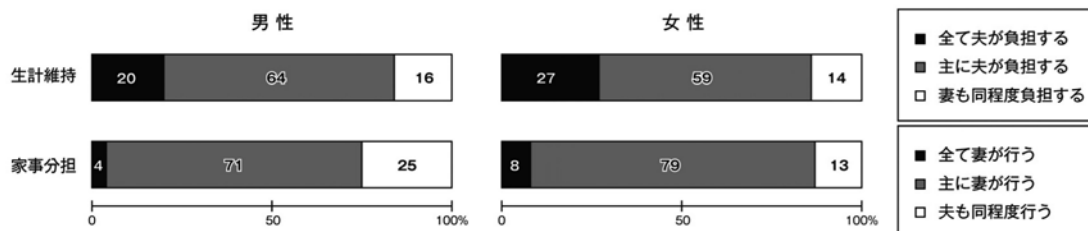


図8 同居の場合の生計維持と家事分担 (2009年)



図9 配偶者への介護意欲 (2009年)

結婚形態の希望と財産相続についての意識の関係をみたのが図6である。1984年には女性は別居希望が半数近くもいた。男性は同居希望が7割であったが、入籍希望は5割にとどまっていた。2009年には男女とも入籍希望が7割前後に増加している。子どもの有無で同居希望と入籍希望の割合を比較した図7から、いずれも子どもがいる女性が最も低い。しかし、子どもがいる女性も25年前には同居希望が4割、入籍希望は3割であったが、2009年には7割と6割近くにまで増加している。

図6から、財産相続意識についても、「配偶者だけ」と「主に配偶者」を合計した配偶者重視の相続意識をもつ者は、男女とも2割から4割に増加している。女性はどの年度も「実の子だけ」が男性よりも多く、2009年でも3割いる。

同居の場合についての生計維持と家事の役割分担意識を示した図8から、全体としては性別分業が支配的であり、その傾向は女性の方が強いとい

える。男性に比べて女性は生計維持を「全て夫がする」が多く、家事を「夫も同程度行う」が少ない。一方、図9から、配偶者への介護意欲は男女ともに高いが、男性も介護の役割を担うには、日常の家事分担のあり方が問題になってくることはいうまでもない。

#### (4) 結婚後における親族交際意識

年度変化と各年度の男女差についてカイ2乗検定の結果を、表5に示した。親族交際については

表5 結婚後における親族交際意識の有意差 (カイ2乗) 検定

	年度比較		男女比較	
	男性	女性	1984年	2009年
相手の子どもからの呼称	n.s.	***	n.s.	***
相手の子どもとの交際	*	***	*	***
子ども同士との交際	**	*	*	n.s.
相手の子どもによる世話	*	n.s.	n.s.	n.s.

\* p < .05, \*\* p < .01, \*\*\* p < .001, n.s. no significant

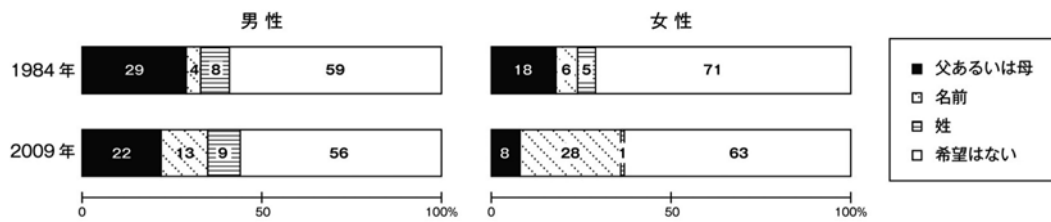


図 10 相手の子どもからの呼称

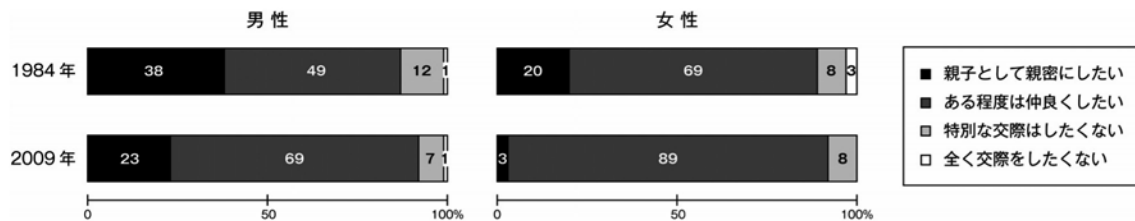


図 11 相手の子どもとの交際

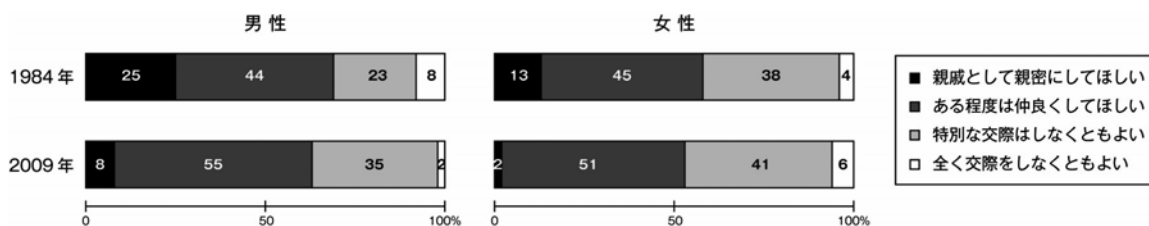


図 12 子ども同士の交際（子どもがいる者）

相手の子どもからの呼称、相手の子どもとの交際、子ども同士の交際、相手の子どもによる老後の世話を取り上げた。相手の子どもからの呼称は女性のみ年度変化がみられ、2009 年には男女差が生じている。相手の子どもとの交際は男女とも年度変化がみられ、どの年度も男女差が大きい。子ども同士の交際は男女とも年度変化がみられ、2009 年には男女差がなくなった。相手の子どもによる老後の世話の期待は男性にのみ年度変化がみられるが、どの年度も男女差はない。

図 10, 11, 12 から明らかなことは、相手の子どもと親密な関係を望む意識が男女ともさらに低下し、とくに女性の低下が目立つ。2009 年には、男性は「父あるいは母」が 2 割、「親子として親密にしたい」も 2 割いるが、女性はいずれもほとんどいない。子ども同士の交際についても「親せきとして親密にしてほしい」が男女ともほとんどなくなり、「交際をしなくともよい」の合計が男性は 4 割、女性は 5 割に増加している。

#### 4 考察

対象者の概況について：会員年齢の上昇は、入会期間の長期化の影響と年長の入会者の増加による。いずれの理由にしても、会員年齢が上昇すれば結婚年齢も上昇し、結婚後の期間は短く限られてくることになるが、高齢者結婚相談所の目的は老後の生活を共に過ごす伴侶探しにあるから、実態が設立目的に近づくことになるので望ましいことといえる。調査対象に選んだ高齢者結婚相談所の場合は、会員の条件が 50 歳以上である。年齢制限をはずせば選択範囲は広がるだろうが、競争も増えることになるから、高齢者が結婚相手を見つけることは難しくなると思う。

生涯未婚率が男女とも上昇しており、とくに男性では著しく、2010 年には男性は 2 割に急増している<sup>13)</sup>。50 歳以上の結婚希望者である本調査対象者の場合も、女性は 25 年前にすでに 1 割を超えており、あまり変化がみられないが、男性の増加は著しく、女性を上回った。男性の 50 歳代は半数が未婚者である。夫婦とも 50 歳を越えて初婚という組み合わせの結婚も、例外ではなく

なっているといえる。

年金が主な収入源になる高齢期にはとくに、持家の有無が生活の安定を大きく左右する。持家率は男性が7割、女性が5割である。同世代一般と比べれば低いとはいえない<sup>14)</sup>、持家率が高いことが高齢期の結婚の特徴である。男性だけでなく女性も自分の家がある者が多く、さらに、男女ともまだ仕事に就いている者も多いので、結婚後に夫婦がどこで暮らすかを定めることは容易でない。入籍同居にこだわらず、多様な結婚形態を選択することも必要になると思うが、女性の経済力と男性の家事能力の低さが問題になる。

**動機づけ要因と抑制要因について：**結婚の動機づけ要因と抑制要因の変化と実態を要約すれば、抑制要因の影響力は低下し、動機づけ要因が強まる傾向にあるといえる。友人関係の機能として日常の交流や楽しみの共有や互助活動などが注目されており、結婚の抑制要因としての働きがあると考えた。しかし、大多数の者が信頼できる友人はいるが、病気時の世話などの互助活動はあまりみられない。孤独を緩和することはできても、安心までは得られず、友人関係は結婚の抑制要因になりえていない。

さらに、高齢者の結婚を否定する規範の圧力は弱まり、子どもに対する期待も低下している。だが、男女とも子どもに介護を期待しない者の半数は病気時に世話を頼める人がいない。男性は女性以上に子どもに期待をしない者が増加している。一人暮らしで、子どもがいても期待をしないという男性が多くなり、結婚へ動機づける要因として男性の孤立した状況が懸念される。

結婚の動機づけ要因として男性は性的欲求と孤独感が、女性は孤独感があり、病気や介護に対する不安が加わる。高齢期においても男女が出会い交際をする契機として、性的な要因は重要であるが、他の調査結果でも同様に、性的欲求の男女差は大きい<sup>15)</sup>。一方、エイジレスやアンチエイジングが取り上げられ、年をとってもおしゃれや若さの保持に対する女性の関心は強く、高齢でも魅力的な女性が多くなった。異性としての魅力を高める努力が男性も必要であり、高齢期の結婚を活性化させることにつながる。

**結婚形態の選択と夫婦関係について：**子どもへの期待や規範の圧力が低下し、同居希望と入籍希望が増加している。25年前は子どもの有無で同居と入籍の希望に大きな差があり、女性は子どもがいる場合には、同居希望が4割、入籍希望は3割の低さであった。夫と死別後の生活や自分の介

護への不安から、子どもとの関係を維持するために、自由な男女の結びつきを選択していくと思われたが、2009年には子どもがいる女性でも入籍希望が6割近くに達している。

子どもが親の再婚に反対する理由に財産相続の問題があるので、入籍希望が増加することによって、相続問題は介護の問題とも関連して重要性を増す。25年前は子ども重視の考えが大勢であったが、男女とも相続意識は入籍希望の有無と有意な関係がみられ<sup>\*</sup>、入籍希望が多数を占めるようになるにともない、配偶者重視へと動き始めている。これまで暗黙に合意されていた子ども優位の相続形態が崩れたことによって、不一致が生じやすくなってきた。財産相続はする側にとっても受ける側にとっても重大な関心事であるので、曖昧にしたり先送りにしたりすることは問題を深刻化させることになる。率直な話し合いや取り決めが必要であり、その際には親のリーダーシップが重要になる。

子どもに対する介護期待は低下しているが、配偶者への介護意欲は男女ともに高く、介護意欲は同居希望者の方が、さらに、入籍希望者の方が高い<sup>\*</sup>。いずれにしても、配偶者への介護意欲の高さから夫婦で支え合える老後を予想させるが、「生計維持は夫で家事は妻」という性別分業意識が別居の場合でもみられ、同居の場合には支配的である。長年連れ添った夫婦が老後生活に適応するために夫婦関係を見直し、再構築をしていくことは容易でない。しかし、高齢期に結婚生活を始めようとするのであるから、互いに役割を担い合う柔軟性が求められるが、男性の経済力と女性の家事役割への依存的態度が強く、役割意識の面では依然として男女とも伝統的な状態にとどまったままである。

**結婚後における親族交際意識について：**25年前から結婚後の親族交際意識は全体的に低く、2009年にはさらに低下している。自分の子どもに対する期待も低下しているのだから当然といえる。親族交際意識と入籍希望の有無との関連を検討したが、入籍希望と有意な関係が認められた項目は男性の「相手の子どもとの交際」の1項目だけであり、親族交際意識は全体として入籍希望の有無で差はみられない<sup>\*</sup>。「ある程度仲良く」と考える者が大多数であり、女性は男性以上に親子としての親密な関係よりも距離を置くことを望む者が多い。近すぎず離れすぎない親子の関係とは近所づきあいに似ている。双方の自発性と自由裁量による部分が大きいから、互いの考え方を合致

させることは難しく、結果として疎遠になりやすいことが懸念される。

## 5. 今後の課題

1984 年から 2009 年の 25 年間ににおける高齢期の配偶者選択の意識と行動の変化について、男女間の一致・不一致に焦点をあてながら検討した。今後の課題として 3 点を指摘したい。

この 25 年間に平均寿命が 5 歳程度延び、人生 80 年時代を迎えている。健康で若々しい高齢者が増加し、無配偶者の数も増大しているが、高齢期の結婚は依然として少なく、配偶者選択の活動も低調であるといえる。25 年前は高齢者結婚相談所が開設されて間もない頃であり、当時は茶飲み友達相談所という名称が用いられていた。高齢者の性や結婚を否定する規範が強かったからである。高齢期の結婚を抑制する要因について検討し、影響力の低下を確かめた本調査結果から、外的要因によるよりも、高齢者自身の側に結婚を望まない理由や原因があるように思う。一般の高齢者も対象にし、異性の友人関係についても掘り下げた調査研究が必要である。

親が子どもとの間におく距離感は、親密な関係を築く努力の煩わしさによると推察される反面、子どもに対する自己規制の態度としても理解することができ、それは高齢期の親子関係のあり方を変化させる要因として注目される。日本では家制度の伝統から年をとると子どもに支えられることを当然視する規範があり、子どもに大きな負担を強いてきた。長寿社会の今日では、高齢者の自立心や独立心の必要性が指摘され、一方的に子どもに依存するのではなく、支え合う関係が求められるようになった。しかし、そのような親子関係の形成は、実の親子の間では、親の期待はずれと子どもの罪悪感が生じやすいために容易でないが、伝統的規範に縛られず高齢期に結婚をしようとする場合には、親自身が子どもとの間に自立的で対等な関係を選択することになる。高齢期の結婚は、親子関係の変化の方向を見定めるための、探索的な事例としての意義が大きい。

高齢期の結婚では、自分や相手の子どもに依存的にならず疎遠にならず、子どもとの距離のとり方が難しい。さらに、配偶者との間で楽しみや喜びそして信頼や安心を実現させるために、夫婦関係をどう結び、深めていくことができるかがより大きな課題であるといえる。高齢期には子育てという目的がないので、多様な男女の関係や結婚形態が可能であると考えられるが、実際には、男女

とも入籍希望が増加し、大多数の者が入籍を望んでいることが分かった。問題は、互いに親密な関係を築く努力をすることによって、満足感と信頼をいかに高めることができるかであり、高齢期に結婚した夫婦を対象にした継続的・追跡的な研究も残されている。

## 引用文献

- 1) 統計でみた平均的なライフサイクル (2012) 平成 23 年版厚生労働白書, 29
- 2) 人口動態統計: 婚姻 (2010) 厚生労働省  
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001082331>
- 3) 第 7 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査 (2010) 内閣府,  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/index.html>
- 4) 前田尚子 (2004) 友人関係のジェンダー差, 老年社会科学, 26(3), 320-328  
澤岡詩野, 福尾健司, 浜田知久馬 (2006) 都市高齢者のネットワークタイプによる友人との交流媒体としての携帯電話の利用状況, 老年社会科学, 28(1), 12-20
- 5) 高齢者結婚問題研究会 (1999) 高齢者の結婚問題に関する調査研究報告書, 長寿開発センター
- 6) 高橋久美子 (1986) 老年期における配偶者選択, 福岡教育大学, 35 号 (第 5 分冊), 125-136
- 7) 副田義也 (1978) 主体的な老年像を求めて (現代のエスプリ 126), 至文堂, 5-24
- 8) 家族形態別にみた高齢者の割合 (厚生行政基礎調査)  
[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/pdf/1s2s\\_1\\_2.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/pdf/1s2s_1_2.pdf)
- 9) 第 7 回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査 (2010) 内閣府,  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/kiso/zentai/index.html>
- 10) 山田昌弘, 白河桃子 (2008) 「婚活」時代, 共同印刷株式会社
- 11) NHK 無縁社会プロジェクト取材班 (2010) 無縁社会, 文芸春秋
- 12) 和多田峯一 (1989) 老婚のすすめ, 鈴木出版
- 13) 性別生涯未婚率 (2012 年版人口統計資料集) 国立社会保障・人口問題研究所  
<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2012.asp?chap=0>

- 14) 年齢別持家率（住宅・土地統計調査 2009 年）  
総務省統計局  
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001025163&cycode=0>
- 15) 荒木乳根子，井上勝也（1992）老いと性（現代のエスプリ No.301），至文堂

付表 有意差（カイ 2 乗）検定一覧

	男 性			女 性		
	カイ 2 乗値	自由度	p 値	カイ 2 乗値	自由度	p 値
入籍・内縁希望×同居・別居希望	29.31	1	***	19.69	1	***
入籍・内縁希望×財産相続意識	8.68	3	*	13.61	3	**
子どもへの介護期待×病気時の世話	18.88	6	**	15.79	6	*
配偶者への介護意欲×入籍・内縁希望	7.71	2	*	5.18	2	n.s
配偶者への介護意欲×同居・別居希望	4.87	2	n.s	13.33	2	**
入籍・内縁希望×相手の子どもからの呼称	3.48	3	n.s	2.19	3	n.s
入籍・内縁希望×相手の子どもとの交際	8.09	3	*	0.31	3	n.s
入籍・内縁希望×子ども同士の交際	1.12	2	n.s	2.20	2	n.s
入籍・内縁希望×相手の子どもによる世話	0	3	n.s	4.09	3	n.s

本文中の★印をつけた事項の有意差検定結果を示した。